

研究所報

目次

「リサーチライブラリー」	1
2007年度「指定研究」研究組織一覧	2
2007年度「指定研究」研究目的紹介	4
2007年度「一般研究」選考結果発表	8
2007年度「一般研究」研究目的紹介	10
学会参加報告	16
海外研究調査出張報告	20
特別研究員研究成果報告	23
彙報	24

リサーチライブラリー

国際仏教研究チーフ 教授 宮下晴輝

いま真宗総合研究所は、真宗総合学術センターと名づけられた響流館の最上4階にある。発足当初は、大学構内の北西の隅にあった学寮の建物を研究所施設としていた。それから10年ほどで1号館の増設がはじまり、寺町通り今出川上るにあった学寮を改装した建物が研究所の施設になった。そしてまたほぼ10年後の2001年に、大学構内に戻ってきたのである。

響流館は、大谷大学の教育研究を生み出す新たな中心となるようその願いのもとに建設された。それに多少とも参画していたものとして、研究所が響流館の4階にあることにそれなりの感慨をもっている。

15年以上も前になるが、カリフォルニア大学ロサンゼルス校の図書館から要請があつて、本学の図書館員を派遣していたことがある。その折りの夏、一緒にアメリカの大学の図書館を巡り歩いた。大学そのものが成り立っている基盤がずいぶん異なっていて、そこにある図書館もその規模の大きさや設備サービスの充実という点では比較にならないのであるが、とても印象に残ったことがある。それはロサンゼルス校の図書館長ダイアナさんと話したときである。名詞の肩書きには「ライブラリアン」とだけあった。その名前がもっている権威と誇りを、彼女を通してはじめて知ったように思う。ひょっとすると「最後のライブラリアン」に会って話をお聞きしたのかもしれない。その時に教えていただいた言葉が「リサーチライブラリー」である。研究機能が付設された図書館のことである。

当時のアメリカの大学では、図書の電子化と図書館相互の効率的な交流が課題となっていて、従来の図書館学課程の授業は大幅に削減され、それまでの図書館がもっていた社会的な意義が大きく変わろう

としていた時期であつたように思う。いまはもうずいぶんと変わっているだろう。

本学では、確かそのころ1994年から95年にかけてはじめて構内の電話を使ってコンピュータ回線を開設したはずであり、図書の電子化などというのは遠い先の話だった。だからかえって従来の図書館像の未来を示す「リサーチライブラリー」という言葉が印象に残ったのだろう。そしてそれは大学の教育研究の未来をも意味しているように思った。

それからは後を追うように日本の社会も「情報化」の嵐にまきこまれていった。情報化といっても、それは大学や図書館のテクノロジャイズにすぎないのに、それが何かを生み出すという期待だけが先行した。本学の響流館の建設もその嵐のただなかで行なわれていったのである。

さまざまな期待が寄せられ、さまざまな要因がからんで、いまの響流館がたちあがっている。あまりにも多くの要素が混在しているけれども、私にとっては、図書館と研究所とが一体になった「リサーチライブラリー」を目指した響流館である。そのなにかは実現されていると思う。少なくとも、図書館と研究所が一つの建物のなかにあるのだから。

学長を研究代表者とする指定研究である国際仏教研究は、研究所の発足以来続けられてきた研究プロジェクトである。ここには時代がどう変わろうと本学が願い求め果たしていかなければならない研究課題がある。仏教思想という宝を掘り出し世界に公開することである。それをいよいよ実現するための響流館である。形が内実を表わすにちがいない。しかし内実を意識化しないでは形の意味をうけとることもできない。なお一層の奮励が必要である。

2007(平成19)年度「指定研究」研究組織一覽

【特別指定研究】

研究名	研究課題及び研究組織
大谷大学親鸞聖人 750回御遠忌記念 特別指定研究	<p>研究課題 親鸞像の再構築</p> <p>研究員 安富信哉(チーフ・教授・真宗学) 門脇健(教授・宗教学) 木越康(准教授・真宗学) 山野俊郎(准教授・仏教学) 東館紹見(講師・日本仏教史学) 山田恵文(講師・真宗学)</p> <p>嘱託研究員 平雅行(大阪大学教授)</p> <p>研究補助員 小山正文(同朋大学非常勤講師・安城市本證寺住職) 松金直美(博士後期課程満期退学) 玉光真人(博士後期課程第1学年)</p>

【指定研究】

研究名	研究課題及び研究組織
大学史研究	<p>研究課題 大学史関係資料の収集・公開・研究</p> <p>研究員 織田顕祐(チーフ・教授・仏教学) 加来雄之(准教授・真宗学) 東館紹見(講師・日本仏教史学)</p> <p>嘱託研究員 伊東恵深(本学非常勤講師)</p> <p>研究補助員 西本祐攝(短期大学部助教) 藤間哲祐(博士後期課程満期退学) 小野賢明(博士後期課程満期退学) 大畑博嗣(博士後期課程第2学年)</p>
国際仏教研究	<p>研究課題 諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の整理・収集・公開</p> <p>研究員 宮下晴輝(チーフ・教授・仏教学) 門脇健(キャップ・教授・宗教学) 桂華淳祥(キャップ・教授・東洋史学) 田辺繁治(教授・社会人類学・東南アジア人類学) ディディエ ヴェステル(教授・フランス語・フランス文化) 番場寛(教授・フランス語・フランス文学) 木越康(准教授・真宗学) 松川節(准教授・東洋史学) 村山保史(准教授・西洋哲学) 李青(准教授・東北淪陷期文学・中国語) 阿部利洋(講師・社会学) 井上尚実(キャップ・講師・真宗学) 藤枝真(講師・哲学・宗教学) 箕浦暁雄(講師・仏教学)</p> <p>嘱託研究員 羽田信生(毎田周一センター所長) Michael Pye(本学客員教授・マールブルク大学名誉教授) Mark L. Blum(ニューヨーク州立大学准教授) Paul Watt(デポー大学教授)</p>

	研究補助員	山本 琢 (博士後期課程満期退学) 宮本 浩 尊 (博士後期課程第3学年) マイケル・コンウェイ (博士後期課程第2学年) 村田 知 子 (博士後期課程第2学年)
西藏文献研究	研究課題 研究員 嘱託研究員 研究補助員	チベット語文献のデータベース化 福田 洋 一 (チーフ・教授・仏教学) 小谷 信千代 (教授・仏教学) 白館 戒 雲 (教授・仏教学) 三宅 伸一郎 (講師・チベット学) Steven Hartwell (マルチスクリプト・ソリューション社) 野村 正次郎 (広島修道大学非常勤講師) 清水 洋 平 (日本学術振興会特別研究員・本学非常勤講師) ダシュ ショバラニ (本学特別研究員・本学非常勤講師) 櫻井 智 浩 (本学非常勤講師) 松下 俊 英 (博士後期課程第2学年) 太田 蔭 子 (博士後期課程第1学年)
真宗本廟 (東本願寺) 造営史研究	研究課題 研究員 嘱託研究員 研究補助員	真宗本廟 (東本願寺) 造営史料の研究並びに『真宗本廟 (東本願寺) 造営史』 (仮称) の編纂 木場 明 志 (チーフ・教授・国史学) 平野 寿 則 (講師・日本近世史・仏教史) 伊藤 延 男 (神戸芸術工科大学名誉教授) 川上 貢 (京都大学名誉教授・京都市埋蔵文化財研究所長) 永井 規 男 (関西大学名誉教授) 山岸 常 人 (京都大学大学院准教授) 安藤 弥 (同朋大学講師) 川端 泰 幸 (本学非常勤講師) 江上 琢 成 (元種智院大学非常勤講師) 登谷 伸 宏 (京都大学博士後期課程修了) 大谷 めぐみ (博士後期課程満期退学) 工藤 克 洋 (博士後期課程第2学年)

2007(平成19)年度「指定研究」研究目的紹介

大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念
特別指定研究

親鸞像の再構築

チーフ・教授 安富 信哉
(真宗学)

本研究班は、2011年に迎える親鸞聖人750回御遠忌記念事業の一環として発足した。今、親鸞を顕彰し親鸞思想の現代的意義を明らかにすることが内外から求められている。この課題に応えることを目的として、学際的な視点と方法に立って、「親鸞像の再構築」というテーマの下、以下4つのプロジェクトから研究を推進している。

- ①史的な親鸞像の再検討
- ②思想教学の検証
- ③現代における親鸞思想との出会い
- ④文献目録の作成

どのような親鸞像を「今」描くことができるかということが、本研究班の主要課題である。これに先立って、これまでどのような親鸞像が描かれてきたのかを歴史に遡って検討する必要があると考え、史的な親鸞像を尋ねてきた。①「史的な親鸞像の再検討」においてはすでに五人の先生をお招きし、のべ六回の公開研究会を行ってきた。それぞれ中世・近世・近現代における親鸞像や、御遠忌の歴史そのものを問う眼差しを提供して頂いた。本年度はこれらの研究会の内容を整理し、公開していく予定である。また、引き続き研究会を継続し、史的親鸞像の検討を進めていく。

④「文献目録の作成」については、昨年度の成果を『真宗総合研究所研究紀要』第24号(2007年3月発行)にサンプルとして掲載した。内外からの批判・助言を得た上で、過去50年に渡る真宗関係文献の目録作成を目指して、引き続き整理作業を進めていく。

また、本年度は②「思想教学の検証」のプロジェクトを推進していく予定である。これは、大谷大学・宗門における親鸞思想研究がどのような展開を見せてきたのかを明らかにし、親鸞教学の総合的な確立を目指すことを目的として立てられているテーマである。まずは、近代に誕生した清沢満之と、清沢の精神を受け継いだ教学者たち、即ち曾我量深、金子大栄、安田理深などが親鸞思

想研究において果たした役割を、研究会を通して検証していくこととしたい。更に、③「現代における親鸞思想との出会い」は、親鸞思想と諸宗教・諸思想との関わりや、親鸞教学の現代的・普遍的意味を明らかにすることを目的として立てられたテーマである。この課題については、他の研究班との連繋を意識しながら検討を重ねていく予定である。

以上の研究テーマを通して、現代に生きる私たちに親鸞はどのような指標となり得るのか。現代人の指標としての「親鸞像の再構築」に向けて、歴史学・真宗教学・仏教学・宗教学・人文学などの各方面からの検討を引き続き行っていく。

大学史研究

大学史関係資料の 収集・公開・研究

チーフ・教授 織田 顕祐
(仏教学)

1. 本研究の中長期的な目的

本研究の目的は、本学における一切の学問研究・教育の指標となる学事三百数十年の歩みを確かめ、これを前近代史と近代史の中に適確に位置づけることにある。真宗の学事の歩みは、本学の初代学長である清沢満之による近代の諸学問・社会に対峙し得る教学・思想の提示、およびこれを受けて学事を体系化すべく1901(明治34)年に東京に移転・開学された真宗大学を軸として、それ以前と以後とに大別される。本研究は、この二つの時期それぞれにおいて、真宗の学事が如何なる様態で、如何なる思想・教学を生み出し、当該社会の人びととどのように関わってきたのかを、あらゆる側面から解明し、その意味を問う営みを継続する拠点としての意味を有する。かかる存立の意義に基づき、本年度においてなすべき目標は以下の通りである。

2. 昨年度までの成果と本年度の目標

①清沢満之の思想・教学に関する基礎的資料の整備

清沢満之に関する主要なテキストデータベースについては、修正を含めて整備が完了している。昨年度進めた未公開の自筆資料の和洋混交資料の翻刻を継続し、その

完成を期す。また、清沢満之記念館（愛知県碧南市）との共同により、『臘扇記』本文・注釈を今年度中に刊行する。

②佐々木月樵研究

本学第三代学長である佐々木月樵は、清沢満之、および実証的仏教研究の礎を築いた二代学長南条文雄のあとを受けた大正期に、本学の研究・教育の姿勢・方法に基本的な方向性を与えた人物として重要である。昨年度までに収集をほぼ完了した佐々木に関する文献をもとに、彼が如何なる学のあり方を志向したのか、具体的な検討に着手する。

③近世学事・学寮研究

昨年度は、大谷派の学寮と本願寺派の学林の事績をほぼ網羅した『近世学寮年表』が一応の完成を見、近世学寮の最盛期を現出した第五代講師香月院深励についても著述目録を完成し得た。本年度はこれらの成果に基づき、近世学寮における時期区分の検討、および近世の学事を担った主要な人物の一人である香月院深励の思想・教学の研究等に着手し、それらの各時代社会における適確な位置づけを目指す。

④収集した原資料の保存

『大谷大学百年史』刊行時収集資料のうちの原資料について、長期保存に適する環境の整備（中性紙箱・封筒への移し替えと保管）を継続して行く。

⑤東本願寺現代史の研究

真宗大谷派との密接な連絡のもとで、資料整理・年表の作成を行っていく。

⑥その他

(1)他大学・研究機関との交流

真宗の学事に関する研究が客観性、蓋然性を持つものであることを証しする上でも不可欠である。今年度も「全国大学史資料協議会」への参加等を通じて活発な交流を行っていききたい。

(2)大学文書の収集・保存・公開に関する基礎的作業への着手

大学の諸部署に保管される文書の保存と公開は、近年の情報公開の観点からもその原則の確立が急務である。今年度はその重要性に鑑み、具体的な作業に着手する。

(3)ホームページの作成

本研究の成果を公開し学内外と課題を共有していく上で、また、建学の精神の普及・検討の上から近年注目されている「自校史教育」の一環としても、重要な課題と捉え取り組んでいく。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の整理・収集・公開

チーフ・教授 宮下 晴輝
(仏教学)

【研究テーマ】

諸外国における仏教研究の動向の把握と必要資料の整理・収集・公開

【研究目的】

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究の成果を公開することを目的としている。この目的遂行のために、これまで受信と発信の両面から、以下のような研究を進めてきた。

○海外における仏教関係資料の収集・整理と、デジタル・データベースの構築。

○海外における仏教を中心とした宗教状況の調査と研究。

○真宗・仏教系国際学会等の企画開催や、宗教系国際学会への研究員の派遣。

○真宗・仏教関連資料の翻訳と出版。

【研究計画】

本研究班では、長年英語圏を中心として研究活動を行ってきたが、近年は中国やヨーロッパなど、他の言語文化圏へも活動の範囲を拡大している。具体的には英語圏、ドイツ・フランス語圏、中国語圏などである。各言語文化圏それぞれの研究テーマ・目的ならびに本年度の研究計画は以下の通りである。

—英語班—

〈研究テーマ〉

①諸外国における仏教研究動向の把握

②真宗・仏教関連資料の翻訳出版

〈研究目的〉

①英語班ではこれまで、国際学会への研究員の派遣や国際学会の企画開催などを継続的に行ってきた。本年度は8月にカナダで開催される国際真宗学会に「Transcending Dualism: Neither Monastic nor secular as a Way through the Troubled World」と題してパネル

参加する予定である。また、他の国際学会に研究員を派遣し、情報収集ならびに本学仏教研究の発信に努めたい。

- ②親鸞の思想を世界に発信することを重要な研究課題の一つとしており、近年はいわゆる 近代真宗教学 の翻訳に取り組んできた。現在はニューヨーク州立大学 (The State University of New York) からの出版に向けて最終的な作業中であるが、本年度は、昨年末完成済みの解説を含めた最終原稿を入稿し、校正に入る予定である。また、昨年度翻訳済みの清沢満之「真宗大学開校の辞」に加え、さらに清沢の他の著述について翻訳を行う予定である。

—ドイツ・フランス班—

〈研究テーマ〉

仏教・他宗教比較研究

- ①「プロテスタント神学との対話」
②「近代化された宗教特に浄土真宗の社会学的観点からの研究」

〈研究の目的〉

- ①「プロテスタント神学との対話」
マールブルク大学神学部との研究交流を中心にしながら、浄土真宗とプロテスタント神学との対話・比較研究を継続していく。神学部教授ディートリッヒ・コルシュ氏の著書『マルティン・ルター』を翻訳・出版する。
②「近代化された宗教特に浄土真宗の社会学的観点からの研究」
フランス国立高等研究院 (EPHE) の宗教社会学部門と開催したシンポジウム「宗教と近代合理的精神—一日仏文化の比較をとおして」を日本語で出版する。基調講演、発表、総括の他に、参加したモデレータからの論文も併せて編集する予定である。

—中国班—

〈研究テーマ〉

中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化

〈研究目的〉

中国華北地域 (河北・河南・山西・山東各省)・東北地域 (遼寧・吉林・黒竜江各省)・東部モンゴル (内モンゴル自治区東部) 地域における宗教及び関連文化の諸相を、歴史史料による再構成及び現地調査によって明らかにする。その目的で、第一に、昨年度に引き続き、大谷大学図書館所蔵真宗大谷派海外布教資料に含まれる当該地域関連資料の目録作成作業を進める。第二に、中国東北師範大学との共同研究というかたちで、当該地域に

おける中国仏教寺院、チベット・モンゴル仏教寺院の概況と、諸宗教の混交形態を、現地調査によって明らかにしていく。こうした基礎作業の中から、19世紀末から20世紀前半に当該地域に展開した日本仏教の活動と、それがその後の当該地域においていかなる影響を残したかという問題にも留意していきたい。

西藏文献研究

チベット語文献の データベース化

チーフ・教授 福田 洋一
(仏教学)

本研究課題は、学内外のチベット語文献を調査・整理し、データベース化を進めることによって、チベット研究の基盤を構築し、その促進をはかることを目的としている。その目的を達成するために、具体的には以下の5項目からなる課題に取り組む。

1) 大谷大学図書館所蔵チベット語文献のデータベース化。

a. 北京版カンギュルの研究

寺本婉雅や桜部文鏡ら本学チベット研究の先学による『甘殊爾勘同目録』(1930~32年)は、刊行後70年を経た現在も、すぐれたリファレンスとしてその価値を失っていない。この研究では、絶版となり入手困難となっている当該目録の合冊復刊をおこなう。復刊に際しては、若干の補訂を付す。

b. 蔵外文献の研究

大谷大学図書館所蔵のチベット蔵外文献のうち、稀観書の公開という点から『俱舍論語義解明・善説陽光』(no.13972)『プラサンナバーダ註心髓』(no.13964)『目連救母経』(no.12767)などを翻刻・電子化し公開する。また、すでに電子化テキスト公開済みの『ミラレバ伝』とならぶ15世紀宗教文学の代表作『マルバ伝』の電子化と公開をおこない、広くチベット宗教文学読解研究に資す。

2) Otani Unicode Tibetan Language Kitのサポート

公開中のPublic Beta版のユーザから送られてくるバグ

の指摘等に対応する。また、ローマ字転写テキストを利用するために、Wylie→Unicodeのコンバータを開発する。

3) 現地研究機関(西藏社会科学院)との提携

提携締結をめざし交渉を進めるとともに、別個に、チベット語資料の収集など、できる限りの現地調査をおこなう。

4) パーリ語文献研究が収集した資料の整理と管理。

『パンニャーサ・ジャータカ』に関する未整理資料の整理と、資料に対する内外からの問い合わせへの対応をおこなう。

5) オリッサ州立博物館所蔵貝葉文献の研究。

独自の貝葉写本文化が栄えたオリッサの州立博物館には、37000点以上におよぶ貝葉文献が所蔵されている。しかし、本格的な研究はいまだなされていない。なぜなら、その全体像が十分に把握されていないからである。貝葉は紙と異なり寿命があり、物理的には将来確実に消滅し、その記録・保存は急務である。本研究では、現地研究者たちの協力を得て、以上の見地から、写本群簡易リストの完成・公開をめざす。

真宗本廟(東本願寺)造営史研究

真宗本廟(東本願寺)造営史料の研究ならびに『真宗本廟(東本願寺)造営史』(仮称)の編纂

チーフ・教授 木場 明志
(国史学)

真宗大谷派は2011年に宗祖親鸞聖人750回御遠忌を迎える。2000年以来、本山御遠忌本部の記念事業「両堂再建史料の研究・整理・保管」において進めてきた両堂再建を中心とする真宗本廟(東本願寺)造営再建史料の整理点数は数千点を越えており、これらの調査作業は今なお本山内において継続中である。上記の調査作業に並行して、本プロジェクトでは、それらの史料に基づく研究を進める。さらに、その研究成果を世に問うべく、御遠忌記念事業の一端として『真宗本廟(東本願寺)造営史』(仮称)の編纂を進めることを目的とする。歴史・建築・美術工芸・防災などの諸分野に及んで真宗本廟(東本願寺)造営の経験が一般にも生かされるならば、

記念事業としての意味は大きい。

特に、信仰史・教団史に加えて建築史の専門研究者を多く加え、真宗本廟(東本願寺)の建築意図・仕様意図などを具体的に描き出し、真宗門徒の帰依処としての真宗本廟の存在意味の確認に寄与したい。

真宗本廟は、宗祖親鸞聖人の示寂後11年目の1272(文永9)年に宗祖を敬慕する人びとによって東山大谷の地に創設された。以後、御影堂・阿弥陀堂の備えた両堂形式となり、江戸初期の1602(慶長7)年に、徳川家康の寺地寄進を受けて東六条に寺基を定めて東本願寺が創立された。その後、1658~70(明暦・寛文年間)年に改築されて本格建築となったが、1788(天明8)年、1823(文政6)年、1858(安政5)年、1864(元治1)年の4度に及んで罹災焼失し、そのたびに再建されて現在の両堂建築は1895(明治28)年の竣工になる。造営の経過、教化体制、職人組織、部分請負の寄進、門徒参加、などの諸問題について、明治造営の場合に限って幾分か知られてきた程度であったが、今般の研究では、東本願寺が所蔵する数千点の新発見造営史料の利用を通して、江戸期の再建にまで遡って造営史全般に関する研究を行う。新史料の語ってくれるところは極めて多大と期待される。

なお、今年度以降の研究計画を示せば、次の通りである。まず2007年度は、大谷大学真宗総合研究所に移管した本山史料、および関連諸資料の内容精査を進め、『真宗本廟(東本願寺)造営史』(仮称)の内容目次を決める。また史料調査の成果をふまえ、複写史料及び調書を目次に基づいて分類し、執筆用資料ファイルを作成する。合わせて、各執筆担当者を選定し、執筆依頼を行い、個別課題の研究報告会を実施して原稿執筆に入る。2008年度以降も、関連諸資料の調査・研究・分類を継続し、各執筆者からの種々の要望に応じるとともに、原稿執筆・編纂作業を順次に進める。2009年度中には、本文内容および諸史料の校正作業を行い、本プロジェクト終了後、本山御遠忌事務局において、2010年11月に刊行する計画である。

2007(平成19)年度「一般研究」選考結果発表

【共同研究】

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
皇 紀 夫	研究課題 仏教と教育の関係性に関する哲学的・臨床的研究 - 「心の教育」の所在を探る - 研究員 皇 紀 夫 (教授・臨床教育学) 門 脇 健 (教授・宗教学) 関 口 敏 美 (准教授・教育学) 山 内 清 郎 (講師・教育人間学・臨床教育学)	科研採択のため 補助金なし
小 谷 信千代	研究課題 新発見の安慧『俱舍論実義疏』梵文写本の研究 研究員 小 谷 信千代 (教授・仏教学) 箕 浦 暁 雄 (講師・仏教学) 協同研究員 松 田 和 信 (佛教学教授) 福 田 琢 (同朋大学准教授) 本 庄 良 文 (佛教学非常勤講師) 研究協力員 都 真 雄 (博士後期課程満期退学) 相 良 大 (博士後期課程第2学年)	科研採択のため 補助金なし
豊 島 修	研究課題 本願所寺院組織の確立と信仰文化の形成・伝播に関する 歴史民俗学的研究 研究員 豊 島 修 (教授・日本近世庶民生活文化史・日本宗教民俗学) 平 野 寿 則 (講師・日本近世史・仏教史) 協同研究員 鈴 木 昭 英 (元長岡市立科学博物館長) 根 井 淨 (龍谷大学特任教授) 山 本 殖 生 (新宮市教育委員会文化振興室長) 加 藤 基 樹 (本学任期制助教)	200万円
田 辺 繁 治	研究課題 東南アジア大陸部における生成的コミュニティ 研究員 田 辺 繁 治 (教授・社会人類学) 高 井 康 弘 (教授・社会学・文化人類学) 阿 部 利 洋 (講師・社会学) 協同研究員 松 田 素 二 (京都大学大学院教授) 藤 田 直 子 (元本学任期制助手) 研究協力員 矢 野 博 之 (博士後期課程第3学年) 堀 井 愛 (博士後期課程第3学年) 古 谷 伸 子 (博士後期課程第3学年)	科研採択のため 補助金なし
志 藤 修 史	研究課題 聴覚障害者への地域生活支援のためのプログラム研究 研究員 志 藤 修 史 (講師・社会福祉学) 安 井 喜 行 (教授・社会福祉学)	200万円
東 館 紹 見	研究課題 平安時代寺院聖教と古記録の研究 研究員 佐々木 令 信 (教授・日本仏教史学) 宮 崎 健 司 (教授・日本古代史) 東 館 紹 見 (講師・日本仏教史学) 協同研究員 頼 富 本 宏 (種智院大学長・教授) 赤 尾 栄 慶 (京都国立博物館企画室長) 杉 本 理 (本学非常勤講師) 堅 田 理 (本学非常勤講師)	200万円

【個人研究】

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
延塚知道	研究課題 『浄土論註』研究－親鸞の視点より－ 研究員 延塚知道(教授・真宗学)	100万円
番場寛	研究課題 ジャック・ラカンの精神分析理論による演劇の分析の 意義と可能性 研究員 番場寛(教授・フランス語・フランス文学)	100万円

2007(平成19)年度「一般研究」研究目的紹介

共同研究

仏教と教育の関係性に関する哲学的・臨床的研究 —「心の教育」の所在を探る—

研究代表者・教授 皇 紀夫
(臨床教育学)

こころの時代の心の教育は、深刻化する教育の危機的事態に対処する切り札であるかのようにして、ここ10年来、教育関係者や宗教関係者の関心を惹いて来た。近代公教育制度の成立以来、学校教育と宗教の関係は、信教の自由の理念に基づいて機能的な分離を原則とすると同時に、この理念に従い、宗教への寛容の精神の育成と私学における宗教教育の自由が強調されてきたわけであるが、最近では心の教育論に便乗して学校教育と宗教との性急かつ無原則な関係づけを主張する議論もある。

本研究は、心の教育という正体不明な教育論に安易に与することなく、なおかつ《心の教育》を重要な哲学的教育学的な実践課題として探求することを旨とするものである。流行している対症療法的な心の教育論に回収されない、真実度の高い《心の教育》の所在と役割意味とを解明するとともに、そうした意味での《心の教育》の具体相をイメージ化できる地点に到達したいと考えている。そのためには、本領域における従来の研究スタイルを批判的に刷新する研究方法の構築が不可避の課題であると言える。

仏教と教育の関係性の研究は、近年発足した仏教教育学会においても関心を惹くテーマであるのだが、当学会の研究を含めて、これまでの研究の一般的傾向は、仏教言説と仏教用語によって教育を語るパターン、すなわち、宇宙と生命に関する仏教的な根源語によって教育を語る、いわば《仏教》的教育論のパターンが主流であって、教育学にとっては難解な未見の専門用語からなるこの種の教育論が、果たして近代的な人間観に基礎づけられた教育言説と交差しているかどうかは定かでない。むしろ、こうした《仏教》的教育論は、教育学との批判的応答の場を十分に経過しないまま自己完結的に立論される傾向が強いと思う。

上記の目的に従って、昨年度の研究では、仏教系の教育理念を掲げる大学や高校中学の教育機関、さらには幼

保の幼児教育・保育機関から、教育理念に関する資料の収集を行い、それらを分析するための理論的な仮説の設定を試みた。また、仏教教育の実践に意欲的な大学学長と面談して、教育言説を収録した。さらに、日本仏教教育学会に参加して、最近の研究動向と研究レベルに関する調査を実施した。

今年度は、これらの研究をさらに発展させ、仏教教育言説のレトリック論的分析の適格性を高め、仏説ならぬ仏教的教育論の特性を明らかにすることによって、それらが現実に《心の教育》の課題をどのように設定しているかを批判的に吟味したい。今年度は、さらに幼児教育・保育関係の資料の収集と分析を加え、本研究の充実を期したい。

共同研究

新発見の安慧『俱舎論実義疏』 梵文写本の研究

研究代表者・教授 小谷 信千代
(仏教学)

本研究は、近年発見された『俱舎論実義疏』のサンسكريット写本を校訂出版することを目的とする。

『俱舎論実義疏』は、およそ6世紀頃のインドで安慧によって著された『俱舎論』の注釈書である。その内容の詳細さや分量の膨大さは、称友の『俱舎論明瞭義』をも凌ぐほどで、最も重要なアビダルマの注釈書のひとつである。言うまでもなく『俱舎論実義疏』の解説は、アビダルマ研究の分野に大きな進展をもたらすこととなる。

『俱舎論実義疏』には、チベット大蔵経各版本の論疏部中、雑部に収められているチベット語訳と、漢語から翻訳された古代ウイグル語写本と、チベット語訳からのモンゴル語訳、また、北京図書館に所蔵されており蘇軍によって公表された敦煌出土の漢語断片、そして、パリア国民図書館に所蔵され、『大正新修大蔵経』に収録された敦煌出土の漢語断片がすでに知られている。チベット語訳およびモンゴル語訳は完本であるが、それ以外は部分的に残存するものであったり、抄訳あるいは備忘録ではないかとも推測されてきたもので、いずれにしてもチ

ベット語訳と厳密に対応するテキストではない。サンスクリット文に最も忠実であろうと考えられるチベット語訳も、当時のチベット語訳者が当該コロフォンにおいて言及している通り十分な翻訳とは言えず、またチベット文が難解であることも手伝って、今日まで部分的な解説研究がなされてきたにすぎない。よって、サンスクリット写本が現存する『俱舎論明瞭義』の解説研究が進み、その全体像がほぼ明らかになった今日では、チベット語訳でしかその全体像が知られない安慧の『俱舎論実義疏』や満増の『俱舎注疏随相』の解説は、今日の研究状況に照らして必要不可欠の課題なのである。

このような状況下、近年ウィーン(Institute for the Cultural and Intellectual History of Asia, Austrian Academy of Sciences)と、北京の中国蔵学研究中心との協力によって、『俱舎論実義疏』のサンスクリット写本を参照することが可能となった。そこで、仏教写本の解説を専門とする研究者と、アビダルマ文献研究を専門とする研究者とが共同で研究プロジェクトを立ちあげ、当該写本の校訂出版を目指す。具体的には『俱舎論実義疏』サンスクリット写本を解説し、最終的にはそれをDiplomatic EditionならびにCritical Editionとして出版する予定である。

共同研究

本願所寺院組織の確立と信仰文化の形成・伝播に関する歴史民俗学的研究

研究代表者・教授 豊島 修
(国史学)

今日、日本の民俗信仰研究は様々な角度から研究が進められ、地域差や信仰内容などの具体性が明らかになりつつある。歴史的にみると、民俗信仰の内容は主として近世期に多様化していったことがよく知られている。

このような民俗信仰の展開には、各種の信仰を持ち運んだ民間宗教者(聖)の関与が指摘されており、近年では、中世後期以降の寺社史料に散見する「本願」(本願所寺院)の宗教的経済的活動との関係においても注目されている。

そもそも「本願」とは一般に、寺社修復の役を担い、その修復料としての米銭の喜捨をもとめて諸国を廻国勧進し、寺社の縁起や靈験を唱導した宗教者であり、結果的に信仰文化を各地へ伝播させることとなった。また

「本願所」とはそれらの宗教者を統轄した寺院組織である。その典型的で大規模な事例は紀州熊野三山の「本願所」で、膨大な史料内容とそれらの歴史的展開や文化史的な位置づけについては、『熊野本願所史料』として刊行し、その成果を世に問うている。

「本願」は16世紀初め頃より全国の寺社に出現し活躍したことが史料的に知られる一方、近世初期になると商家や寺家との争論が頻発し、職掌や役割が制限されたり、追放されたりする「本願」もいた。その意味でまず「本願」の歴史の実態を究明することは、特定の寺社史における組織的解明にとどまらず、中世後期～近世の歴史学的諸問題の検討にも寄与できる研究課題である。

「本願」の研究として一歩進んでいるのは、熊野三山と山城国東山清水寺の「本願」の事例である。熊野三山の「本願」を例に挙げると、「本願所」は修験道を兼帯していたことが知られ、その成立段階においても修験道との関わりが深い存在であった。また、少なくとも17世紀中頃以前まで熊野比丘尼は熊野三山や新宮神倉山などの聖地に登山して修行を行い、庵主・本願という寺院組織体から「熊野願職」(勧進職)を免許され、諸国に赴いては熊野牛玉札などの配札や、「老いの坂図」と「地獄絵」を上下に配した構図で特徴的な絵画類を使用して絵解きを行い、勧進行為を展開したことが知られる。熊野の「本願」は極めて組織的であり、その勧進スタイルにおいても「絵解き」という手法によって庶民レベルにまで広く熊野信仰を唱導した。すなわち「本願所」は、単なる寺社の堂塔修復のための募財を集積する組織ではなく、信仰の流布に深く関わる組織であったといえよう。しかし、寺社によっては必ずしも「本願」が出現しなかったり、「本願所」という組織が成り立っていなかったりする事例が確認され、熊野三山「本願」の研究成果による定義が当てはまらない事例もいくつか確認されているので、さらに事例の収集と詳細検討が必要である。

以上、「本願」の諸問題は、勧進による信仰文化の形成と伝播はもとより、寺院史・神社史、政治経済史など複数の問題に関連する研究課題であることが指摘されるが、いまなお十分な研究成果が備わっていないのが現状であり、各地の寺社「本願」とその組織における実態と文化史的意義を歴史民俗学的に明らかにしていくことが本研究の主たる目的である。

共同研究

東南アジア大陸部における 生成的コミュニティ

研究代表者・教授 田辺 繁治
(社会人類学)

本研究の目的は、今日のグローバル化とモダニティの深化の中で、東南アジアにおける新しいタイプのコミュニティ（共同体）の出現とそれらを特徴づける協働性と社会性の実態を記述し、そこに貫流する人びとの欲望、ニーズや想像力が彼らの現在と未来における新たな生の様式を生成していく動態を探求することにある。

東南アジア大陸部、特にタイなどにおける従来の社会科学的なコミュニティ研究は構造的、システムの捉え方に基づくものであり、そこには主として二つの流れがあった。第一は第二次大戦後のアメリカの文化人類学は社会システムの比較研究であり、タイ社会は「緩やかに構造化された社会システム」という概念によって描かれ、日本などの強く規範化された社会システムと対比されてきた。第二はイギリスの社会人類学者S・タンバイアのタイ農村における仏教や精霊信仰の研究によって代表される1970年代以降の構造主義的な研究であり、コミュニティにおける人びとの宗教的世界観、価値観や実践は、要素間の対立する関係の集積として全体論的な構造をなしていることが主張されてきた。

こうした社会システム論と構造主義という二つの流れは20世紀後半を通して、我が国のタイを含む東南アジア地域のコミュニティ研究の展開にも多大な影響を与えてきた。それらの研究では、国民国家など大きな社会編成のもとに組み込まれながらも、コミュニティは独自の社会組織や文化的特徴を備えたある種の全体的な構造やシステムをもつものと考えられてきたのである。しかし、境界によって囲まれた場所的なコミュニティ、そこに形成された文化やアイデンティティを一体的なものとして捉えようとする従来のコミュニティ概念は、20世紀末からの人びとの移動、流動、排除の激化や実体的な社会関係を超越して想像的に構築されるコミュニティやネットワークなどの出現によって根本的な見直しを迫られるようになった。

そのような社会的現実の急激な変動を背景にしながら、中心部の「伝統的」農村コミュニティ、あるいは周

辺に位置するマイノリティのコミュニティに関する近年の研究は、国民国家とその行政機関、国際機関、NGOやその他の勢力との関係において変動する姿を記述するようになった。しかしそれらの試みの多くも、人びとの生の新たな欲望とニーズを直接的に把握し考察するよりも、むしろそれらを従来のコミュニティ概念の延長線上に捉えようとする限界をもつものである。

そこで本研究は、従来のコミュニティ研究の対象にとどまらず、多様で多角的な志向性と組織形態、新しい協働性と社会性をもつ集団、アソシエーション、ネットワークなどの近年における出現に注目する。そこにはこれまでのコミュニティ概念にはおさまりきれない人びとの欲望、想像力、潜勢力が満ちており、それらはこれまでの構造やシステムとして「存在」するコミュニティとは違い、何ものかに「成る」、つまり自らを「生成変化」させていく力動的な過程として初めて捉えることが可能だと考える。こうしたニーズと想像力の噴出と生成変化という特徴を備えるコミュニティを、本研究では「生成的コミュニティ (generative community)」と呼ぶ。

本研究はそれらの新たな理論的視点を検討しながら、東南アジア大陸部のタイを中心としラオス、カンボジアなどにおける生成的コミュニティの実態をタイなどの海外共同研究者との共同作業を通して、移動労働者や難民の相互扶助グループ、HIV/エイズ・障害者自助グループ、紛争和解運動、社会林業における環境保全運動などの事例を調査することによって明らかにしようとする。

共同研究

聴覚障害者への地域生活支援のための プログラム研究

研究代表者・講師 志藤 修史
(社会福祉学)

本研究では、地域でくらす高齢聴覚障害者への対策の課題を明らかにし、今後の具体的な対策の展開方策を示すため、聴覚障害者の生活実態の調査及びサービス実施機関へのヒアリング調査を行う。

きこえやことばに障害を持つ聴覚障害者への対策は、単なる情報伝達手段についてのサポートといったアプローチのみではなく、コミュニケーション障害から起因する、生活全般にかかわる「くらしにくさ」への総合的対

応が必要とされている。特に近年、地域生活を支援する機関からは、高齢化、重度化、さらには重複障害者の増加などが指摘されており、それらへの対策は急を要する課題となっている。

一方、高齢聴覚障害者への対応一つを例にとっても、全国的には高齢聴覚障害者への施設の開所などの取り組みが見られるものの、地域で暮らす多くの高齢聴覚障害者への対策は介護保険における一般的サービスでの対応が中心であり、実質的に利用不可能な状況におかれるなど、聴覚障害者への具体的対応は未だ確立しているとはいえない状況である。また、平成7年の阪神淡路大震災、平成16年の中越地震などで、地域とのつながりが希薄であり、かつサービスの利用に結びついてなかった多くの高齢聴覚障害者が、深刻な被害と避難・復興生活の困難さを抱えたことは記憶に新しい。

今般成立・実施をみた障害者自立支援法において強調されているように、身近な地域での生活支援との連動も含め、聴覚障害者に対するサービスの今後の展開についてはこれからの課題といえる。

このような中、平成17年度に特定非営利活動法人CS障害者放送統一機構が独立行政法人福祉医療機構の助成を受け実施した「聴覚障害者緊急災害情報保障調査・訓練事業」における講師活動、さらに平成18年からは「聴覚障害者災害対策マニュアル」作成委員への就任。全国聴覚障害者情報提供施設協議会が独立行政法人福祉医療機構の助成を受け作成した「手話通訳コーディネーターマニュアル」の分担執筆、並びに平成18年度からの同マニュアル作成事業の委員就任。同年より社会福祉法人京都聴覚言語障害者福祉協会が実施している「聴覚障害者情報ネットワーク構築事業」の委員への就任などから、聴覚障害者への対策を進めるにあたり、改めて地域での聴覚障害者の生活実態把握の必要性が感じられた。

特に、一定の地域性とそこでのサービスの状況、障害の状況、さらには階層性などにより規定され生み出されてくると想定される生活問題の把握については、一定のまとまりのあるサンプルへのヒアリング調査こそ有効であると考えられる。

我が国でのこの分野の研究が少ない中、京都（平成2・平成17）、大阪（平成11）、滋賀（平成14）、全国（平成15）などで行われたいくつかの先行の調査研究業績をふまえ、聴覚障害者への情報提供施設並びに聴覚障害者団体などの協力を得つつ、平成19年から平成20年の2カ年にわたり調査並びに分析、サービス提供システムの構築に取り組んでいく。

1年目では手話通訳者、要約記者を調査員として組織したうえで生活実態調査に取り組み、2年目では、調

査結果についての分析を調査員組織並びに聴覚障害者支援組織、聴覚障害者組織などとともにに行い、今後の支援の課題を明確にするとともに、そのシステム化を構想する。

共同研究

平安時代寺院聖教と 古記録の研究

研究代表者・講師 東館 紹見
(日本仏教史学)

本研究は、大谷大学に所蔵されている、平安時代の貴族藤原資房の日記『春記』（1巻）本文と紙背の寺院聖教を総合的に研究することを目的としている。

本学所蔵『春記』が書写されて後、紙背に寺院聖教が書写されたことは、2005年度真宗総合研究所の共同研究「平安時代古記録の研究」（代表：佐々木令信）において明らかにした通りである。本研究では、こうした共同研究で得られた成果を踏まえて、本学所蔵『春記』本文と紙背の寺院聖教をめぐって、その具体的関係の解明を通じて、ひろく古記録本文と紙背の寺院聖教の全体像を明らかにすることを所期の研究目的として設定している。

従来の先行研究では、本学所蔵『春記』紙背をめぐり、真言宗の学僧寛有の著作『大日経秘要抄』の一部分であるとされてきた。しかしながら、2005年度の前述の共同研究成果により、同じ寛有の著作『顕密立教差別記』であることが判明したのである。

他方、こうした研究成果を詳細に検討する過程で新たな課題が生じたことも事実である。すなわち、『春記』本文と紙背『顕密立教差別記』をめぐり、第一に両者の成立に関する具体的な因果関係の問題、第二に寛有が所属する寺院社会に『春記』のような古記録が保管されていた理由などといった、古記録が聖教の料紙として用いられた要因や人的関係、さらにはその社会的背景などの研究課題が残されていたのである。

さらには、こうした課題に加えて、本学所蔵『春記』と同様に東寺旧蔵本に分類されている京都国立博物館所蔵本（3巻）・宮内庁書陵部所蔵本（8巻）の紙背において、同じ真言宗僧侶寛有の著作がそれぞれ残されていることを如何に合理的に説明するべきかという課題が残されている。『春記』を事例として、寛有を結節点とし

て展開した寺院社会と貴族社会との関係を考えるという研究課題が浮かび上がるのである。

本研究では、以上のような研究課題について、学際的視座から各研究分野の研究者による共同研究を行う必要があると考えている。こうした共同研究の作業を通じて、実り多い研究成果を得ることにより、所期の研究目的の達成を目指すものである。

個人研究

『浄土論註』研究 —親鸞の視点より—

研究代表者・教授 延塚 知道
(真宗学)

曇鸞の『浄土論註』は天親菩薩の『浄土論』の一字一句の注釈書ではあっても、インドの大乗菩薩道をそのまま継承しているわけではない。そうではなくて、『観無量寿経』による曇鸞の徹底した自力無効の自覚を回転軸として、「一切外道凡夫人」に開かれた無上仏道へと転回させている。そこに、曇鸞の仕事の最も重要な意味がある。だから仏道の主体が菩薩から凡夫へ、その行が五念門から、質を転じて一心という信心へ、さらに、菩薩の本願力廻向から阿弥陀如来の本願力廻向へ、その証が、阿毘跋致から正定聚へと展開する。もちろん親鸞は、曇鸞の仏道観を受け、それをさらに根源化して、浄土真宗を、群萌に開かれた誓願一仏乗として明らかにした。

しかし、凡夫に如来の智慧海である一乗が実現するなどということは、仏法不思議としか言いようがない。凡夫の方にその根拠はない。その根拠となっている如来の働きの方の根源的な道理を明らかにしたものが、親鸞の本願力廻向である。果たして親鸞は、「浄土真宗に二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり」と真宗大綱を宣言する。

したがって親鸞においては、われわれに教・行・信・証を恵んで浄土真宗に立たせる阿弥陀如来からの働きが、二種廻向である。あたかも鶴嘴を振りおろして一切衆生の無明の闇に突き立てるように、本願の名号を衆生に与え、その掘削によってうがたれた大地から溢れるように湧きあがってくる大悲心によって、われわれに一乗の仏道を実現して下さるのである。そのように群萌に一

乗の仏道を恵む根源力として阿弥陀如来の本願力廻向を明らかにしたのである。それについては言うまでもなく、天親・曇鸞の導きがある。『論註』の研究を通して、世親の『浄土論』から曇鸞の『論註』へどのように展開しているか。さらにまた親鸞の『教行信証』へはどのように展開しているか、を曇鸞の『論註』を中心軸にして尋ねたい。特に曇鸞の仏道観、さらに浄土観、そして親鸞の浄土真宗にまで展開してくる本願力廻向の思想的な意味を尋ねてみたい。

個人研究

ジャック・ラカンの精神分析理論による 演劇の分析の意義と可能性

研究代表者・教授 番場 寛
(フランス語・フランス文学)

フロイトが命名したオイディプスコンプレックスのものと成ったのは、ソフォクレスの悲劇であるが、ラカンが自己の精神分析理論を説明するのに、自分が扱った実際の臨床例ではなく、フロイトの臨床例とともに多く用いているのも文学作品である。

今回の一般研究申請に至ったのは、ラカンの著作やセミナーにおける演劇作品の分析の意味を問いたいと考えたからである。彼もフロイト同様、あるいはそれ以上に演劇作品を臨床例と同じくらしい重要性をおいて論じている。特に『欲望とその解釈』と題されたセミナーでは、もっぱら『ハムレット』を題材に「欲望のグラフ」と呼ばれる独創的な図を使って人間の欲望のメカニズムを解き明かしている。また、『転移』と題されたセミナーでは、ポール・クローデルのクフォンテーヌという登場人物の三部作を論じている。そして「欲望」という問題を考えるうえで欠かせないのが、『精神分析の倫理』と題されたセミナーで論じられるギリシア悲劇の登場人物、アンチゴーネの分析である。ラカンはこのセミナーで「汝の欲望においてけっして譲らないよう」主張し、それを貫いた登場人物としてアンチゴーネを紹介している。この言葉はラカンの「欲望」の理論の特異性を強調するとき必ず引き合いに出されるのであるが、多くの宗教や道徳で説かれているように欲望を抑圧することなく推し進めた人物として称揚している。

これらのフロイトやラカンの精神分析理論の説明で紹

介、引用された劇の登場人物たちの行動は、実際の症例の人物たちと同じく理論を説明するのに有効なのであるうか？

特に難解なラカン理論を理解するにはまず、それらの戯曲に遡り実際の登場人物の行動を分析することがラカンのテキスト読解の作業と同様に必要である。演劇というテーマには直接に関係がなくてもラカン理論についてのセミナーが複数のフランスのラカン派で行われている。それらのセミナーで有効と思われるものには可能な限り参加したい。

次に、ラカンが引用している戯曲が現実に現代のフランスでどのように演じられ、そこにラカンが見たような登場人物の心理が分析できるのかを実際に観劇して分析したい。またラカンが扱った戯曲以外の現代に場面を設定した現代の演劇がどのように上演され、そこにラカンが見たような登場人物の欲望が分析できるのかどうかそれも研究したい。

学会参加報告

真宗総合研究所開設25周年記念シンポジウム 「南都仏教の中世的展開」

前国際仏教研究チーフ・教授 ロバート F. ローズ

2006年10月6日（金）・7日（土）の両日にわたり、真宗総合研究所開設25周年を記念して、国際仏教研究班を中心に「南都仏教の中世的展開」（Medieval Developments of Nara Buddhism）と題したシンポジウムが開催された。近年、中世における南都（奈良）仏教の重要性がクローズ・アップされるようになってきている。従来、鎌倉仏教の研究は、法然・親鸞・道元・日蓮などを祖師とする、いわゆる鎌倉新仏教の研究が中心であった。しかし黒田俊雄教授の顕密体制論の影響もあり、最近では法相宗や律宗などの南都の諸宗も、鎌倉時代には時代の要請を受けて、大きく発展・変革したことが認識されるようになった。アメリカの日本宗教研究者の間でも、このような見解が一般化し、南都諸宗の中世的展開について論じる研究者が増えつつある。

このような状況のもと、真宗総合研究所では、設立25周年を記念して、南都仏教の中世的展開に関心を寄せる日米の研究者16名を招き、シンポジウムを開催した。3のパネルに分けて12の研究発表が行われたが、国際学会にふさわしく、発表は日本語・英語の両言語で行われた。またシンポジウムの一環として米国プリンストン大学のジャクリーヌ・ストーン教授による日本語の公開講演「死の克服—中世日本の臨終行儀をめぐる—」も行われた。さらに初日の午後には、パネリストたちのために響流館のツアーが行われ、その一環として本学図書館が所蔵する南都仏教関係の写本や貴重図書を見ることができた。

このシンポジウムの大きな狙いは、米国からは日本仏教研究の第一人者とともに、特に若手研究者を招き、日本の南都仏教研究者と活発な意見交換を行い、今後の研究のアドバイスを受けられる場所を提供することにあった。各パネルとも参加者は30人から40人とやや少なめであったが、主催者の狙い通り、参加者のあいだでは突っ込んだ議論が行われ、大変有意義な会となった。

シンポジウムのプログラムは次の通りであった。（各発表者の肩書きは、シンポジウム当日のものを記す。）

開会式（10月6日（金）9：30）

パネル1（10：00—12：00）

司会 サラ・ホートン Sarah Horton

（マカレスター大学助教授）

(1)ポール・グローナー Paul Groner

（バージニア大学教授）

「南都仏教と北嶺仏教の区別における戒律の役割」
（The Role of Precepts in the Distinction between Nanto and Hokurei Buddhism）

(2)ローリー・ミークス Lori Meeks

（南カリフォルニア大学助教授）

「歌と祈りの日々—法華寺と中世日本における尼僧制度の再構築」
（Days of Song and Prayer: Hokkeji and the Renunciation of Female Monasticism in Medieval Japan）

(3)前川健一（東京大学COE「死生学の構築」特任研究員）

「日本華嚴宗の正統と異端・再考」
（Reexamination of Orthodoxy and Heresy in Japanese Hua-yen School）

(4)織田顕祐（大谷大学助教授）

「凝然による華嚴教学の組織化」
（Gyonen's Systematization of Kegon Thought）

公開講演会（10月6日（金）3：00—5：00）

司会 マイケル・パイ Michael Pye

（大谷大学客員教授）

ジャクリーン・ストーン Jacqueline Stone

（プリンストン大学教授）

「死の克服—中世日本の臨終行儀をめぐる—」
（Overcoming Death: Deathbed Rituals in Medieval Japan）

リセプション（5：30 ビッグバレー）

パネル2（10月7日（土）10：00—12：00）

司会 蓑輪 顕量 Kenryo Minowa（愛知学院大学教授）

(1)楠 淳證 Junsho Kusunoki（龍谷大学教授）

「日本唯識における命終心思想の一展開」

（One Development in the Thought Concerning the Mind）

at Death in Japanese Yuishiki Buddhism)

- (2)マイケル・ジャメント Michael Jamentz
(立命館大学講師)

「法隆寺所蔵『五天竺図』の再考—多面性の意義を読み解く試み」(Reviewing the Horyuji *Gotenjiku-zu*: Deciphering Multiple Narratives)

- (3)ハンク・グラスマン Hank Glassman
(ハバフォード大学助教授)

「南都仏教と地藏信仰—浄土教を中心に」(Nanto Bukkyo and the Jizo Cult: With Special Reference to the Pure Land Tradition)

- (4)三木彰円 Akimaru Miki (大谷大学講師)
「中世の聖徳太子像—親鸞の場合」(The Image of Shotoku Taishi in Medieval Japan: The Case of Shinran)

- (2)藤谷 昌紀 Masanori Fujitani (大谷大学非常勤講師)
「叡尊『勸発菩提心集流壅記』をめぐる」(On Eison's *Kanpotsu bodaishin-shu ruyō-ki*)

- (3)松尾 剛次 Kenji Matsuo (山形大学教授)
「中世都市と律宗の関係—博多と博多大乗寺を中心に」(Concerning the Relationship between Medieval Towns and Ritsu School Focusing on Hakata and Daijōji Temple)

フェアウェル・パーティー
(6:00—8:00 京都ガーデン・パレス)

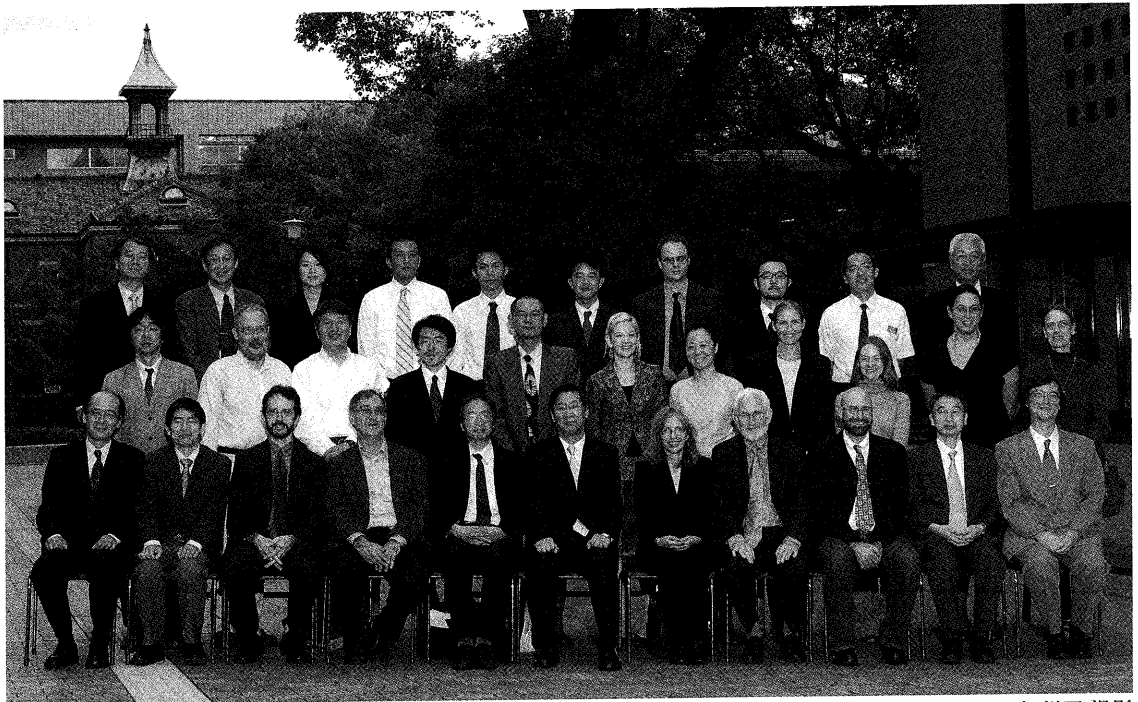
将来的には発表原稿を英文の論文集としてまとめ、欧米の日本仏教研究に貢献することも計画している。

パネル3 (10月7日(土) 1:30—3:00)

司会 上島 享 Susumu Uejima
(京都府立大学助教授)

- (1)デビッド・クインター David Quinter
(スタンフォード大学)

「叡尊の文殊信仰と非人再考」(Resituating Eison's Manjuri Faith and Hinin)



2006.10.6 東 祥司 撮影

学会参加報告

大谷大学真宗総合研究所・フランス国立高等研究院合同シンポジウム 「宗教と近代合理的精神——日仏文化の比較をとおして」

国際仏教研究（ドイツ・フランス班）キャップ・教授・宗教学 門脇 健

去る2006年11月30日（木）12月1日（金）の両日、大谷大学真宗総合研究所とフランス国立高等研究院の合同シンポジウムが「宗教と近代合理的精神——日仏文化の比較を通して」というテーマのもと、本学響流館メディアホールを会場にして開催された。

プログラムは以下の通り（大谷大学以外の所属についてのみ注記している）。

開会式 挨拶；木村 宣彰 大谷大学長

基調報告 「ライシテと世俗化」 門脇 健

第1セッション「宗教と市民社会」

「現代フランスにおける政教分離と宗教」

ジャン・ボベロー（フランス国立高等院名誉院長）

「現代日本における市民宗教」

マイケル・パイ（マールブルク大学教授・大谷大学客員教授、元国際宗教史学会会長）

モデレーター：ハルムート・ロータモンド（フランス国立高等研究院）、木場 明志

第2セッション「医療と宗教」

「医療と宗教における死の世俗化」

セヴリーヌ・マチュウ（フランス国立高等学院・宗教社会学部教授）

「現代日本の終末期医療における仏教と医療の関係」

藤枝 真

モデレーター：村山 保史、番場 寛

第3セッション「宗教と近代化」

「神道、仏教の近代化及び宗教観再考

——明治宗教史の一ページ」

ハルトムート・ロータモンド（フランス国立高等研究院・日本センター長、大谷大学客員教授）

「地獄の喪失——宗教的宇宙観の衰退と日本の近代化」

井上 尚実

モデレーター：木越 康

第4セッション「死と宗教の現在」

「ウルトラモダンの文脈における宗教」

ジャン＝ポール・ヴィレーム（フランス国立高等院・宗教社会学部部長）

「お骨と死生観——現代日本の葬送ビジネスをめぐる」

阿部 利洋

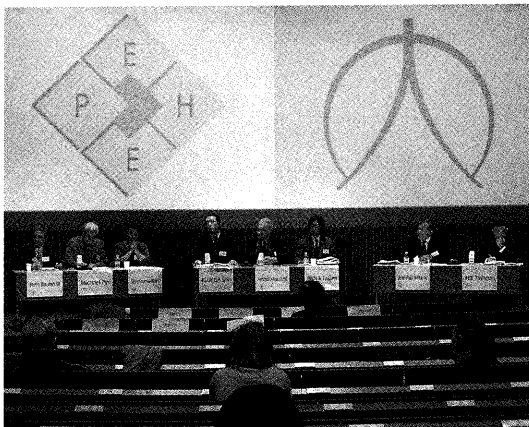
モデレーター：田辺 繁治、杉村 靖彦（京都大学大学院助教授）

総括セッション

総括：「私たちは理性的であると同時に宗教的でいられるだろうか」 ジャン・ボベロー

閉会式 挨拶；兵藤 一夫 真宗総合研究所長

これらのセッションが、発表者・モデレーターのご努力にはもちろんのこと、同時通訳者のスムーズな通訳及び教育研究支援課の周到な事務体制によりきわめて実り多い形で進行し、シンポジウム後の懇親会では、フランス側から次回はパリでの開催が要請された。



このシンポジウムは、本学真宗総合研究所とフランス国立高等研究院・宗教社会学部との研究協定に基づいて企画されたプロジェクトであった。当初は、ライシテというカトリックのフランス独特の政教分離を中心に宗教と社会とのあり方を考察するフランス側と、ドイツ・プロテスタントと「宗教の世俗化」について「宗教間対話」を重ねてきた本研究所の国際仏教部門とがいかにして共同研究を展開することができるか、という問題が危惧された。つまり、浄土真宗の立場に立って「世俗化」という問題を論じてきた我われが、宗教社会学者と同じ地平

で「共同研究」を遂行できるのかという問題があったのである。

そこで我われは、いったん「浄土真宗」という宗教的立場をいったんカッコに入れ、新たに比較宗教学・マイケル・バイ、社会学・阿部利洋、人類学・田辺繁治の先生方のご協力を仰ぎ、現代日本の宗教現象の諸問題をまずは明確化することでこのシンポジウムに臨んだ。市民社会・医療現場・死の現場そして宗教的世界観でいったいどのような問題が起こっているのか、そのことをまずは明確にしようとしたのである。

しかし、このような手続きは、単に宗教社会学者たちとの合同シンポジウムにとってのみ必要なものということにとどまらない。浄土真宗の将来を展望するとき、現代社会が直面する宗教的問題の客観的分析を回避しては、真宗が抱える問題の創造的発展は望みえないであろう。したがって、このような姿勢でシンポジウムに臨むことは、真宗の未来にとっても必要不可欠のものである。

また、この自らの宗教的基盤をいったんカッコに入れるという考察態度は、フランス革命を導いた合理主義の裏側のカトリック的伝統の自明性を対象化するという結果をもたらした。たとえば、フランスの教育現場では、徹底して宗教が排除されているというライシテの原則に従ってイスラームの女性のヴェールの着用も禁止するという動きがあるが、その一方では、カトリックの祝祭日が国民の祝日となっており動く気配はない。フランスにおける合理性を基盤とした共和制とは、その基盤にカトリック的伝統が空気のように存在しているのである。それは、現在においてアメリカのグローバリズムへの抵抗として現象するが、一方ではアラブ系移民問題として問題化してしまう。

したがって、問題は、合理的思考によって把握された宗教的思考と合理的思考の相克という問題にとどまらない。合理的思考によっては意識にのぼることのない身体化された宗教性、空気のように存在している宗教的エートス、つまりそれとは知らずに従っている生き方という文字通りのイデオロギーと近代的合理精神とそしてそれによって批判的に把握された宗教との三すくみの問題なのである。

「宗教と近代的合理精神」というシンポジウムのタイトルは、一見すると、近代化に抵抗する宗教あるいは世俗化してしまった宗教と近代的合理精神の対立をいかに超克していくかを期待させるように見える。実際、我われもそのような道筋が見えはしないか、という淡い期待を抱いたのも事実である。しかし、そこで明らかになってきたのは、人間の生き方つまりシンポジウムの各セッ

ションでテーマとなった「市民として生き方」「病気の受け止め方」「死後の世界」「死の作法」という場面に於いては、合理化された宗教的言説以前の基本的で具体的な人間の生き方に対する動揺が見られるということであった。

それは、たとえば、「良き死」のためにカトリックの「終油」という儀礼、浄土教の臨終儀礼を復活させれば、その動揺がおさまるという問題ではない。近代的医療によって死を先送り可能となった現代人には、死を簡単に受容することは難しい。しかし、そこには「良き死」が有りうるという信念あるいは欲望は、動かしがたい前提としてあるのである。

このような問題は、いわゆる「宗教間対話」では、あまりに自明過ぎて問題になりえないことである。少なくとも、我われは問題にしえなかった。なぜならば、「宗教間対話」で問題となるのは、それぞれの宗教における世界観・人間観あるいは絶対者観であって、それはいわば「心の問題」であり、具体的・社会的な場面での問題を直接論ずるには至らないからである。「戦争と平和」というきわめて重大な問題を論ずる場合でも、多くの場合、結局「寛容」をお互いに確認するだけで終わってしまうのが現状であり、宗教的に戦争に関わるのは一部の異端的過激派である、ということになってしまう。

したがって、このような宗教社会学的視点においてなされた議論を通じて、現代における人間の基本的・具体的生き方の動揺を問題として提示し得たことは、このシンポジウムのきわめて大きな収穫であったと考える。そのような問題を、ひとつの宗教的立場からいかに考えていくか、あるいは、社会科学的な場面でのどのように分析していくべきか、というひとつの基点を提示できたからである。

しかし、それは未だ不確かな点を残したものである。もし、このプロジェクトが今後発展するとしたら、それは、上に述べたような人間の生き方の基本的・具体的な問題をさらに明確に取り出すことを通じて展開していくであろう。

海外研究調査出張報告

大谷大学所蔵パーリ語貝葉写本 『パンニャーサ・ジャータカ』に関わる研究調査報告

西蔵文献研究 嘱託研究員 清水 洋平

布施・戒・瞑想の行を厳密に維持する東南アジア仏教は、現在も社会をリードする生きた仏教である。東南アジアに数多く残る擬経ジャータカ（聖典ジャータカの形式に似せて作られた仏教説話）とも呼ぶべき作品群には、東南アジア独自の仏教受容の姿が映し出されている。こうした仏教の布教とその受容の姿を明らかにするために、特にタイの文学・美術作品や演劇などの源泉として、現在でも「生きた伝統」としての命脈を保っている『パンニャーサ・ジャータカ (Paññāsa jātaḥ : 50の本生話から構成されるジャータカ集成)』が、特に注目されつつある。

東南アジア諸国に広く流布し、その地域の文化に様々な影響を及ぼしている『パンニャーサ・ジャータカ』は、正規のパーリ聖典には属さず、しかも東南アジア撰述文献であるので、今まで仏教学の立場から注目されることは殆どなかった。

このジャータカ集成は、ビルマ文字、クメール文字、タム・ランナー文字、モン文字等で貝葉に書写されて東南アジア各地に伝承されている。ビルマ方面に伝承された『パンニャーサ・ジャータカ』は、P.S. ジャイニ博士により *Zimme-Paññāsa* として Pali Text Society (PTS) から校訂出版されているが、タイ、ラオス、カンボジア方面に伝承されたものは、ビルマ方面伝承のものとはジャータカ名やその表現の多くが異なっており、かなり早い時期に分かれて独自の伝承をしてきたと思われる。だが、これらの完全な刊本は存在しなく研究は殆どなされていない。

大谷大学には、今から百年余り前のタイ王室寄贈を機縁としたパーリ語貝葉（大谷貝葉）と略称）写本が所蔵されているが、その所蔵数は国内最大級である。それらの中には『パンニャーサ・ジャータカ』50話の中、26話（その他独立した形で2話）も存している。そこで『パンニャーサ・ジャータカ』全容解明に繋がる手掛りとして、大谷貝葉を活用した研究が、内外の多くの研究者の協力を得て、科学研究費補助金、大谷大学真宗総合研究所研究費により、約10年間に亘り続けられてきた。その研究過程で、大谷大学真宗総合研究所には、旧指定研究「パーリ語文献研究班」収集の Wat Rachasittharam

寺院所蔵版貝葉写本『パンニャーサ・ジャータカ』の原典写真資料（本資料は大谷大学所蔵版には含まれない物語が含まれており、同寺院以外、海外では大谷大学真宗総合研究所のみが保持する貴重資料）、並びにタイ王室コレクションの一つであり、これまで公開されたことのないタイ王室寺院 Wat Chetupon（通称 Wat Pho）所蔵の『パンニャーサ・ジャータカ』全貝葉写本写真資料が保持されている。その他、東方研究会研究員田辺和子博士が約30年前に招来したタイ国立図書館所蔵貝葉写本『パンニャーサ・ジャータカ』のマイクロフィルム版（四写本）等も同氏により寄贈を受け所持している。

従ってこれらの資料を活用した共同研究が、現在も内外の研究者と共に継続中であり、今回の調査はその一環としての資料研究調査であり、また資料研究調査に加え、現地研究者との意見交換等が、この度の調査の目的である。

以下にその報告を簡単に記す。

- ・調査日程：2007年3月14日（水）～24日（土）
 - ・調査先：タイ王国（バンコック市）
 - ・調査者：清水洋平（西蔵文献研究班嘱託研究員）
- * 田辺和子博士と同行。

3月14日（水）：午前、関西国際空港から出国し、現地時間15時30分、スワンナプーム国際空港に到着。その後ホテルに移動。

3月15日（木）：終日、The Siam Society（タイと近隣諸国の文化、芸術、科学技術等を紹介している機関で、出版社や図書館も併設している）にて関連文献の情報収集。並びに東南アジア地域の貝葉写本研究に実績のあるフランス極東学院（EFEO）バンコック駐在特別研究員 Jacqueline Filliozat 女史との意見交換。

3月16日（金）：J. Filliozat 女史との意見交換並びに様々な現地文字パーリ語写本についての読み込みのトレーニングを受ける（10時～15

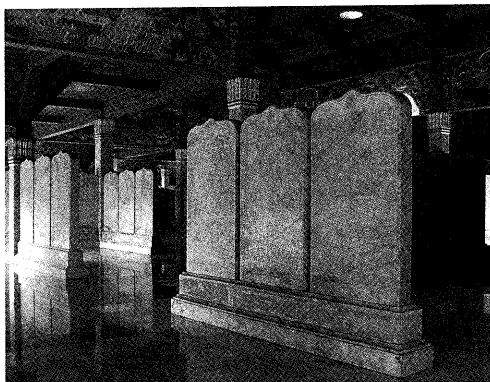
時)。マハーチュラロンコン大学のProf. Peter Masefield氏と東南アジア地域の写本に使われる東南アジア独特のパーリ語の読解についての討議及び意見交換 (15時～17時30分)。

3月17日(土)：同上



一例：モン文字パーリ語写本

3月18日(日)：パーリ語三蔵の全てが大理石の石版に彫られているとされるナコーンバトム県のPhuttha monthon (Buddha maṇḍala)を調査 (9時～18時)。その後、Prof. P. Masefield氏と東南アジア独特のパーリ語の読解についての討議及び意見交換 (18時～20時)。



ナコーンバトム県のPhuttha monthon (Buddha maṇḍala)

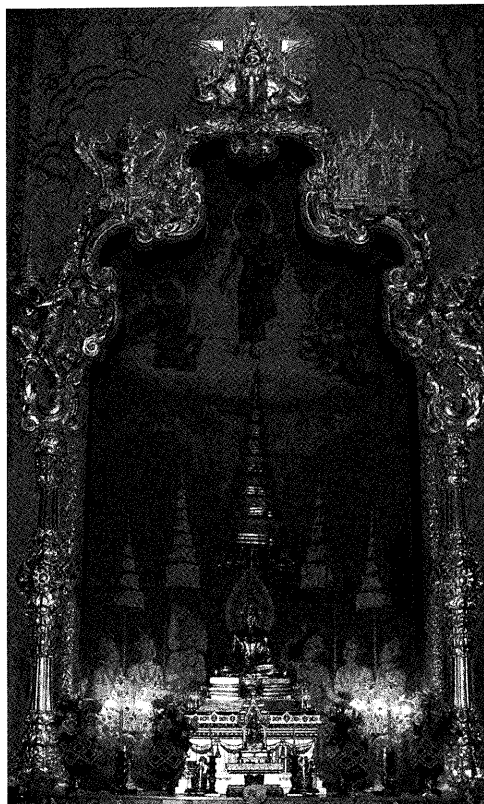
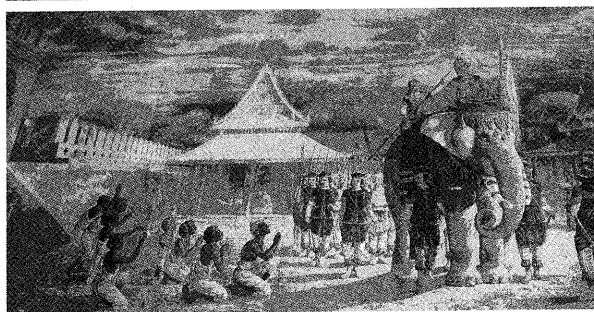
3月19日(月)：午前、マハーチュラロンコン大学仏教学部長でWat Pho寺院のVen. Dr. Thiab Malai長老と意見交換。午後、同氏のご配慮によりWat Pho寺院の仏教儀式に参列。



Wat Pho寺院での仏教儀式

3月20日(火)：J. Filliozat女史との意見交換並びに様々な現地文字パーリ語写本についての読み込みのトレーニングを受ける (10時～15時)。マハーチュラロンコン大学のProf. P. Masefield氏と東南アジア独特のパーリ語の読解についての討議及び意見交換 (15時～17時30分)。

3月21日(水)：同上



Wat Rachathiwat Ratchaworawiharn寺院とその壁画

3月22日(木)：チュラロンコン大学並びに国立図書館へ行き、関連資料の調査(国立図書館では、田辺氏が30年前に招来したタイ国立図書館所蔵貝葉写本『パンニャーサ・ジャータカ』のマイクロフィルム版(四写本)を日本でデジタル画像処理したものを同氏が寄贈)。また、19世紀、イタリア人画家により描かれたジャータカの壁画があるとされる Wat Rachathiwat Ratchaworawiharn寺院も調査。

3月23日(金)：Wat Pho寺院に赴き、Ven. Dr. Thiab Malai長老と意見交換(8時～13時)。The Siam Societyにて関連文献の情報収集並びにJ. Fillionat女史との意見交換(13時～17時30分)。スワンナプーム国際空港より23時59分発の飛行機により出発。

3月24日(土)：朝、関西国際空港に到着。

以上、収集した情報並びに関連資料の検討を今後行っていくが、上記の意見交換などにより、以下のことを確認した。

- ①. 東南アジア地域の写本に使われる難解な東南アジア独特のパーリ語について、更に今後の意見交換が必要であること(東南アジア地域の貝葉写本研究に実績のあるFragile Palm Leaves for the Preservation of Buddhist Literature代表のDr. Peter Skilling氏を交えて、次回2007年8月に予定)。
- ②. パーリ語貝葉写本『パンニャーサ・ジャータカ』に関わるラオス版の写本類の所在が明らかになりつつあり、共同研究調査の申し出があった。
- ③. 一昨年度、J. Fillionat女史の調査により、スリランカのキャンディーにあるUdawattakele Forest Hermitageに、東南アジア撰述の仏教文献貝葉写本が多数所蔵されているという報告がなされ、それらについての共同研究調査実施の計画がある。その件について、現在スリランカの政情が不安定なため、政情が落ち着き次第、調査を実施する。

特別研究員研究成果報告

平安時代後期・鎌倉時代貴族社会における 漢詩文の基礎的研究

大阪大学大学院文学研究科助教・元特別研究員 仁木 夏実

本研究の課題である「平安時代後期・鎌倉時代貴族社会における漢詩文の研究」は、報告者にとって、研究を開始して以来の継続的な研究課題である。従来、注目されることが稀であり、かつその文学史的評価も低調であった当該期の漢詩文は、同時代の歴史や文学等周辺分野の研究が高まるにつれ、本格的な研究の機を迎えたと考える。しかし、そのためにはまず、資料の諸本調査や、作者の伝記的研究といった、ごく基本的な研究の積み上げが不可欠であると考え、二年間の採用期間の間に、以下のようなテーマに基づき研究を行った。

平成一七年度は、主に『鳩嶺集』の検討を行った。『鳩嶺集』は、永仁三年(一二九五)、石清水八幡宮の社僧であった良清(一二五八～一二九九)によって編纂された、石清水八幡宮に関わる漢詩文の摘句集であるが、これまでほとんど漢詩文研究の対象とされることはなかったものである。報告者は石清水八幡宮をはじめ、東京大学史料編纂所、京都大学附属図書館が所蔵する『鳩嶺集』を原本調査し、東京大学史料編纂所蔵本が、現在石清水八幡宮が所蔵する菊大路文書の『鳩嶺集』の謄写本であることをはじめ、諸伝本の整理を行った。また、所収作品の作者の傾向を分析することにより、『鳩嶺集』は、平安時代中後期の作については良清の祖父宗清の「宮寺縁事抄」から採られた可能性が高いものの、それらは例外的な存在であり、中心となるのは儒者や八幡宮の社僧ら良清とほぼ同世代の作者の作であることを確認した。このことにより、『鳩嶺集』編纂作業の一端をうかがうことが出来るようになると同時に、現存する数少ない当該期の漢詩文集としての『鳩嶺集』の位置がより明らかになったと考える。

平成一八年度は次の三つのテーマに沿って研究を行った。

一つは、昨年度より開始した『鳩嶺集』の研究である。これまでほぼ看過されてきた資料であったこともあり、昨年発表した『鳩嶺集』の成立過程について考察した論考は予想以上の反響を得ることが出来た。それとは少し角度を変えた視点から『鳩嶺集』をとらえるべく、所収作者中唯一の中国人禅僧である西潤子曇(一二四九～一三〇六)に注目し、彼の作が入集した背景について考察

した。

次に、『鳩嶺集』とほぼ同時代の宮廷を中心とする漢詩文制作のあり方について研究を行った。従来ほぼ省みられることのなかった当該期の漢詩文であるが、当時の日記類などを見ると、亀山天皇・後宇多天皇父子を中心に、石清水八幡宮をはじめとする寺社への行幸の際には願文が制作され、宮廷でも数多くの詩会が行われていたことが分かる。特に当該年度は後宇多天皇が行った、中国の経書の一つ『尚書』講義とそれに伴う詩会について整理し、その文学史上における意義について考察を行った。この詩会では会場の壁に孔子の画像が掛けられたとされ、報告者がかねて関心を寄せている画像を前にした文学制作の場の例としても注目されるが、さらに、後代の花園天皇が主催した『尚書』講義との関連も留意するべきであろう。

最後に、漢詩文資料の収集が挙げられる。研究計画で述べたことであるが、本研究課題の目的の一つは鎌倉時代漢詩の収集である。従来当該期の漢詩文に向けられた関心はあまりに低く、未だ知られていない資料、あるいは存在は知られていながら翻刻等の紹介が行われていない資料がかなり存在すると思われる。そうした現状を改善すべく、宮内庁書陵部や東京大学史料編纂所において資料調査を行い、「釈奠部類記」(書陵部蔵)、「鎌倉末名家詩懐紙」(史料編纂所蔵)などから漢詩を採集し、研究にとりかかった。また、金剛寺(大阪府河内長野市)の科学研究費補助金による資料調査に継続的に参加し、新たに発見された「明句肝要」という願文類の名句を抄出した書について、共同研究を行った。翻刻と解題からなるその成果は、近く同研究の研究報告書に掲載される予定である。

以下に研究員として採用された期間の業績を挙げる。なお、二〇〇五年四月に発表した「院政期願文における「治天の君」像—藤原永範の鳥羽院関連願文を中心に—」(『詞林』第三七号)や同年六月発表の「高倉院詩壇とその意義」(『中世文学』第五〇号)、二〇〇六年三月発表の「藤原頼長自邸講書考」(『語文』第八四・八五号)は、いずれも特別研究員採用以前の研究をまとめたもの、あるいはそれを発展させたものではあるが、本

研究課題と同様の目的・方法による成果である。

○平成一七年度

論文

- ・「院政期願文における「治天の君」像—藤原永範の鳥羽院関連願文を中心に—」(『詞林』・二〇〇五年四月・第三七号)
- ・「高倉院詩壇とその意義」(『中世文学』・二〇〇五年六月・第五〇号)
- ・「藤原頼長自邸講書考」(『語文』・二〇〇六年二月・第八四・八五輯)
- ・「『鳩嶺集』出典考」(『文藝論叢』・二〇〇六年三月・第六六号)
- ・「平安時代における白居易文学の受容について」(『二〇〇四-二〇〇五年度大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書 台湾における日本文学・国語学の新たな可能性』・二〇〇六年三月)

○平成一八年度

論文

- ・「来日僧西潤子曇について—『鳩嶺集』所収二首制作の背景—」(『ブックロードと異文化交流(仮)』・近日発行予定)

口頭発表

- ・「弘安九年後宇多天皇の上丁御会をめぐる」、国際シンポジウム「世界における日中文化と文学」、東北師範大学／中国吉林省、二〇〇六年九月
- ・「来日僧西潤子曇について—『鳩嶺集』所収二首制作の背景—」、国際学術シンポジウム「ブックロードと文化交流」、浙江工商大学／中国浙江省、二〇〇六年九月

真宗総合研究所彙報 2006.10.1 ~ 2007.4.30

■研究所関係

◎真宗総合研究所委員会

- ◇11月15日(水) 17時10分～ (博綜館5階第3会議室)
 1. 2007(平成19)年度「一般研究」の選考について
 2. その他
- ◇2007年3月9日(金) 16時10分～

(博綜館5階第4会議室)

1. 2006(平成18)年度「指定研究」の研究経過報告について
2. 2007(平成19)年度「指定研究」の研究計画について
3. その他

○「指定研究」チーフ・キャップ・庶務連絡会

- ◇3月2日(金) 16時10分～ (響流館4階真宗総合研究所ミーティングルーム)
 1. 2006(平成18)年度「指定研究」の研究経過について
 2. 2007(平成19)年度「指定研究」の研究計画について
 3. その他

○「指定研究」庶務・研究補助員連絡会

- ◇4月12日(木) 12時10分～ (響流館4階真宗総合研究所ミーティングルーム)
 1. 2007(平成19)年度の「指定研究」研究補助業務について
 2. その他

■特別指定研究

大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念特別指定研究

- ◇10月3日(火) 19:20～20:30 (真宗総合研究所ミーティングルーム)

第7回研究会

 - ・公開研究会の開催について。
 - ・『真宗総合研究所研究紀要』第24号掲載予定の文献目録サンプルについて。

- ◇10月12日(木) 14:00～16:00 (真宗総合研究所ミーティングルーム)

第4回公開研究会

- ・大桑 齊氏(本学名誉教授)
「御遠忌の歴史—自己と時代に向き合う—」

◇11月15日(水) 16:00~18:00
(真宗総合研究所ミーティングルーム)

第5回公開研究会

- ・福島和人氏(本学非常勤講師)
「今、親鸞像の再構築ということ—吉野秀雄、廣小路亨の親鸞思想について—」

◇12月7日(木) 14:00~16:00
(真宗総合研究所ミーティングルーム)

第6回公開研究会

- ・大桑 斉氏(本学名誉教授)
「御遠忌の歴史—自己と時代に向き合う—」

◇2007年3月9日(金) 17:00~19:00
(真宗総合研究所ミーティングルーム)

第8回研究会

- ・2006年度活動総括と今後の活動方針について

◇4月12日(木) 14:30~16:00
(真宗総合研究所ミーティングルーム)

第9回研究会

- ・2007年度活動方針について
- ・今後の公開研究会について

なお、上記研究会の他、文献目録作成のためのパート会議並びに作業を以下の通り行った。

場所：真宗総合研究所 御遠忌記念特別指定研究班

日時：3月8日(木) 16:30~

■指定研究

大学史研究

【研究会】

《公開研究会》

2007年

◇2月19日(月) 16:10~17:40
(真宗総合研究所ミーティングルーム)

- ・森 剛史
「『真宗学事史年表』作成にあたって
—本派学寮学林年表を中心に—」

◇3月14日(水) 15:10~17:40(同上)

- ・加藤基樹
「大学史資料整理の現状と近世学事史研究の事始め」

- ・日野圭悟
「大谷大学近代資料の整理事業報告
—清沢満之関係資料を中心に—」

《近世学事・学寮史研究会》

2007年

◇4月26日(木) 17:00~19:30
(真宗総合研究所ミーティングルーム)

【会議】

《作業連絡会議》

2006年

◇10月31日(火) 16:00~18:00
(真宗総合研究所ミーティングルーム)

◇11月30日(木) 16:00~18:00(同上)

2007年

◇1月16日(火) 16:00~18:00(同上)

◇2月19日(月) 17:40~18:30(同上)

◇3月14日(水) 17:40~18:30(同上)

◇4月9日(木) 16:10~18:00(同上)

《『注釈 臘扇記』編集会議》

◇9月27日(水) 第23回
(真宗総合研究所オープンスペース)

◇10月4日(水) 第24回(同上)

◇10月11日(水) 第25回(同上)

◇11月1日(水) 第26回(同上)

◇11月8日(水) 第27回(同上)

◇11月29日(金) 第28回(同上)

◇12月8日(水) 第29回(同上)

◇12月13日(水) 第30回(同上)

◇12月20日(水) 第31回(同上)

◇12月25日(月) 第32回(同上)

2007年

◇1月10日(水) 第33回(同上)

◇3月5日(月) 第34回(同上)

◇3月7日(水) 第35回(同上)

◇3月9日(金) 第36回(同上)

◇3月12日(月) 第37回(同上)

◇3月13日(火) 第38回(同上)

【調査等】

《他研究機関における大学史研究・
大学史史料室に関する研究会》

◇2006年10月12日~14日
全国大学史資料協議会全国研究会(於・広島大学)
(参加者：東館紹見、森 剛史、日野圭悟)

◇2006年12月5日
全国大学史資料協議会西日本部会第四回研究会
(於・大阪朝日新聞社、くすりの道修町資料館)
(参加者：加藤基樹)

《清沢満之『注釈臘扇記』所出の寺院調査》

◇2006年11月9日~10日
刈谷市敬専寺、安城市本証寺、西尾市唯法寺を調査、
碧南市清沢満之記念館を訪問(いずれも愛知県)。
(参加者：織田顕祐、加来雄之、西本祐攝、日野圭悟)
《香月院深励関係寺院調査》

◇2007年2月8日～9日

あわら市永臨寺、福井市大行寺、鯖江市浄勝寺を調査（いずれも福井県）。所蔵資料の閲覧・撮影。

（参加者：東館紹見、加藤基樹、藤井 学、香月 拓）

《大谷大学図書館貴重書閲覧室における調査》

◇香月院深励関係書籍調査

大谷大学図書館蔵香月院深励関係書籍を調査。目録を作成し、『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第24号にその成果を掲載。

（調査者：加藤基樹、藤井 学、香月 拓）

大学史研究では、上記の活動の他、前期に引き続き『清沢満之全集』未収録文献の翻刻、テキストデータの校正などの事後処理、佐々木月樵研究のための資料調査収集、近世学寮年表の作成研究と大学史資料原本ならびに写真資料の再調査・長期保管作業、所蔵紙焼き資料の整理、東本願寺教団現代史の調査研究などの研究課題について、それらに関する調査・整理作業のほか、史料の閲覧・貸出や質問などへの対応などを日常業務として行った。

国際仏教研究

〈英語班〉

①シンポジウム「南都仏教の中世の展開」開催に関して

・2006年10月3日 18:30～

於 真宗総合研究所ミーティングルーム

「南都仏教学会」事前の打ち合わせ。大学の関係者全員と学会の全体の流れを確認。

・2006年10月6日～7日 於 響流館3階メディアホール

「南都仏教の中世の展開」が開催された。プリンストン大学教授ジャクリン・ストーンによる公開講演会「死の克服—中世日本の臨終行儀をめぐって—」をはじめ、海外・国内から多数の研究者の参加があり、活発な議論が行われた。本学からは、それぞれ以下のような研究報告があった。織田顕祐助教授（現教授）「凝然による華嚴教学の組織化」、三木彰円講師「中世の聖徳太子像—親鸞の場合」、藤谷昌紀非常勤講師（現講師）「叡尊『勸発菩提心集流壅記』をめぐって」。

②「翻訳研究」に関して

・2007年3月5日 13:00～

於 真宗総合研究所オープンスペース

“An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings”のビブリオグラフィーの形式について議論し、スタイルを決め、校正作業の内容を確認。

③「国際真宗学会」参加に関して

・2007年3月19日 16:00～

於 真宗総合研究所オープンスペース

2007年8月3日～5日に開かれる国際真宗学会のパネルの内容について確認。井上、木越研究員、マイケル・コンウェイ研究補助員の他、パネル参加者である加来雄之、一楽真両准教授を交えて、パネルのタイトルについて検討した上で、各発表内容を確認した。

・2007年3月31日 14:00～

於 真宗総合研究所オープンスペース

国際真宗学会のパネルの発表要旨を検討。各発表の視点と論述の展開を確認する。

〈ドイツ・フランス班〉

①2006年11月30日(木) 13:00～、12月1日(金) 10:00～

於 響流館4階メディアホール

「大谷大学真宗総合研究所・フランス国立高等研究院（EPHE）合同シンポジウム：宗教と近代合理的精神——日仏文化の比較をとおして」を開催。

門脇健による基調報告「世俗化とライシテ」をはじめ、本学からはマイケル・バイ「現代日本における市民宗教」、藤枝真「現代日本の終末期医療における仏教と医療の関係」、井上尚実「地獄の喪失——宗教的宇宙観の衰退と日本の近代化」、阿部利洋「お骨と死生観——現代日本における葬送の新たな取り組みから」の発表が行われた。

また、EPHEからは、ジャン・ボベロ「現代フランスにおける政教分離と宗教」、セヴリーヌ・マテユウ「医療と宗教における死の世俗化」、ハルトムート・ロータモンド「神道、仏教の近代化及び宗教観再考—明治宗教史の一ページ—」、ジャン＝ポール・ヴィレーム「ウルトラモダンの文脈における宗教」の発表があった。

シンポジウム終了後、学内のカフェ「ビッグ・ヴァレー」にて懇親会を行った。

〈中国班〉

①大谷大学図書館所蔵真宗大谷派海外布教資料（通称：田代文庫所蔵）の目録作成

10月：旧満洲関連の綴資料（仮番号11・12）の目録作成作業を継続中。引き続き、残された資料（中国華北・華中・華南・台湾、朝鮮半島関係）に順次着手する。

②公開研究会の開催

2007年2月21日(水) 16:10~18:00

於:真宗総合研究所ミーティングルーム

基調報告

大谷大学所蔵東本願寺中国布教関係史料整理の課題
— 現況の報告および今後の活動について —
本学 木場明志 教授

③中国東北師範大学との共同研究「中国東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」の推進

12月1日(金)~10日(日)、招聘研究員として曲曉範・劉景嵐両氏(東北師範大学)が本学にて研究活動を実施。この間、下記の通りの公開研究会を開催。

12月8日(金) 16:10~18:00

(於:響流館3階 マルチメディア演習室)

○偽満洲国の「靖国神社」

— 「新京建国忠霊廟」の建築過程及び偽満当局がそこで挙行した祭祀活動—

東北師範大学歴史文化学院 曲 曉範 教授

○内モンゴル東部地区におけるラマ教の影響と改革

東北師範大学歴史文化学院 劉 景嵐 副教授
通訳 東北師範大学外国語学院 林 嵐 教授

④2007年1月31日(水)~2月1日(木)、松川研究員が東京に出張し、大東文化大学に滞在中の劉厚生・東北師範大学歴史文化学院教授、林嵐・東北師範大学外国語学院教授と会談し、劉厚生教授が専門とする清朝史及び中国東北地方におけるシャマニズムの歴史的沿革と現況について、意見を交換した。

⑤2007年3月27日(火)~3月31日(土)、桂華・松川の研究員2名は中国東北師範大学(長春)を訪問。双方の研究状況を報告しあい、今後の活動について打ち合わせを行った。また、北京においては中国仏教協会を訪問し、中国社会科学院世界宗教研究所のジャミヤンカイチョー(嘉木揚凱朝)氏、中央民族大学のウルジーバヤル(烏力吉巴雅爾)氏、中国仏教協会国際部日本科科长李賀敏氏と、小来栖香頂をはじめとする中国布教者関連史料として中国側に残されているものに関して意見を交換した。

西藏文献研究

《公開研究会》

◇10月30日(月) 午後4時10分~午後5時40分

(響流館4F会議室)

「アメリカにおけるチベット研究の動向およびTHDLの活動状況について」

講師:J.ホプキンズ氏(Jeffrey Hopkins, ヴァージニア大学名誉教授)

S.ワインバーガー氏(Steve Weinberger, THDLマネージャー)

アメリカのチベット仏教研究の第一人者J.ホプキンズ(Jeffrey Hopkins)氏と、チベットに関する総合学術情報サイトTHDL(the Tibetan & Himalayan Digital Library, チベット=ヒマラヤ電子図書館)のマネージャーであるS.ワインバーガー(Steve Weinberger)氏をお招きし、アメリカにおけるチベット研究の動向や、THDLの活動状況につき、お話を聞ききした。学内外より約25名の参加があった。

◇11月29日(水) 午後4時10分~午後5時40分

(響流館4F会議室)

「アルシャー南寺における化身ラマの系譜について」

講師:ジャルサン氏(内蒙古大学蒙古学学院教授)

講師の内蒙古大学蒙古学学院教授ジャルサン氏は、『縁起南寺』(内蒙古大学出版社、2003年)をはじめとする数多くの業績のある研究者であるとともに、内モン・アルシャー南寺(dGa'ldan bstan rgyas gling)に伝わる、17世紀チベットの偉大な政治家にして学者であるデシー・サンギェー・ギャツォ(sDe sridSangs rgyas rgya mtsho, 1653-1705)の化身ラマの系譜に連なる方として、同寺院の寺主でもある。研究会では、氏よりお話を伺いし、チベット・モンゴル仏教に特徴的な「化身ラマ」制度について考察を深めた。氏はモンゴル語を使ってお話され、本学松川節助教授に通訳をつとめていただいた。学内外より約25名の参加があった。

真宗本廟(東本願寺)造営史研究

真宗本廟(東本願寺)造営史の全体像把握のための史料調査・史料翻刻・国内調査等について進捗状況を報告。なお、個別の課題について公開研究会を実施。

《事務連絡会議》

◇10月20日(金) 16:10~17:40

議題:名古屋工作支場跡地調査報告、その他

場所:真宗本廟(東本願寺)造営史研究デスク

◇2007年1月19日(金) 17:30~19:00

議題:本年度総括(調査進捗状況)、来年度基本計画、『造営史』目次、その他

場所:真宗本廟(東本願寺)造営史研究デスク

◇4月17日(火) 16:10~17:40

議題:2007年度研究計画

調査・研究活動の現状と今後の方針(着手順や分担等)

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

《全体会議》

第2回全体会議(第1回公開研究会)

◇11月17日(金) 16:10~17:40

題目:造営史への期待と課題

講師:伊藤延男氏

場所:真宗本廟(東本願寺)造営史研究デスク

第3回全体会議(第2回公開研究会)

◇2007年2月20日(火) 14:00~15:30

題目:真宗本堂の規模と形式—他宗派寺院本堂との比較—

講師:川上 貢氏

場所:響流館マルチメディア演習室

《調査》

◇10月11日(水)

名古屋工作支場跡地の調査

参加者:木場明志、安藤 弥

◇11月10日(金)・11日(土)

尾神嶽殉難地周辺の実地踏査

殉難遺族杉田家の聞き取り調査

新井別院文書の調査

参加者:木場明志、平野寿則、江上琢成、大谷めぐみ

《付記(関連調査)》

◇10月29日(日)

城端別院文書の調査

参加者:木場明志、大谷めぐみ他。

■人事(2007年4月1日付)

研究所主事 (新)廣瀬幸市 (旧)浅見直一郎

□特別研究員

*新田智通

国籍 日本

現職 武蔵野大学非常勤講師

研究期間 2007年2月1日~2008年1月31日(延長)

研究課題 部派仏教における過去仏思想の研究
—Mahāpadānāsutta 注釈書を中心として

指導教員 宮下晴輝 教授

*デッシー・ウゴ(DESSI Ugo)

国籍 イタリア

研究期間 2007年4月1日~2008年3月31日(延長)

研究課題 「現代浄土真宗における社会倫理の研究」

指導教員 安富信哉 教授

*ポルク・エリザベッタ(PORCU Elisabetta)

国籍 イタリア

研究期間 2007年4月1日~2008年3月31日(延長)

研究課題 「現代日本における禅仏教文化の考察」

指導教員 ロバート F.ローズ 教授

*ダシュ ショバラニ(DASH Shobha Rani)

国籍 インド

現職 本学非常勤講師

研究期間 2007年4月1日~2008年3月31日(延長)

研究課題 「仏教文献における比丘尼に関するデータベース構築及びその伝記の研究」

指導教員 小谷信千代 教授

*金 偉(JIN Wei)

国籍 中国

研究期間 2007年4月1日~2008年3月31日

研究課題 「日本説話文学の研究」

指導教員 石橋義秀 教授

*聖 凱(SHENG Kai)

国籍 中国

研究期間 2007年4月20日~2007年7月20日

研究課題 「地論学派と涅槃学派についての研究」

指導教員 木村宣彰 教授

研究所報 第50号

2007年5月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435